

後ろの席の八幡くん

気力♪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

怪我で長らく席を空けていた、比企谷八幡の高校生活の話

-----

オリ主つきですので、苦手な方はブラウザバックを

目次

後ろの席の八幡くん	1
1-Cの大乱闘	7
隣のクラスのがハマさん	14
休日の2人	20

## 後ろの席の八幡くん

ある朝、日課のランニングをしているとき一つの事故を目撃した。それは、散歩中の犬が黒い高そうな車の前に飛び出してしまうと言うもの。

それを見ていたのは二人、俺と、総武高校の制服を着た男。距離は同じくらい。

俺は、先の恐怖を考えてしまつて走り出すのが一歩遅れた。

その間に、男は飛び出して犬を救い出してみせた。

それが、俺が比企谷八幡という男を知るきっかけだった。

「ハツちゃん、お勤めご苦労さん」

「収監はされてねえよ」

「似たようなもんじゃね？ああ、バッグ持つわ」

「…サンキュ」

「ハツちゃんは同士であり不倶戴天の敵だからな。あ、席は俺の後ろな」

松葉杖をつきながらなんとか席に辿り着くハツちゃん。見舞いに行つた時に知つたのだが、彼はなんとMAXコーヒーを缶で飲む派なのである。

ペットボトル派の自分とは相容れないのだ。

しっかりと味わつて飲むハツちゃんと、量を飲んでエネルギーにする自分とでは割と噛み合わない。

が、この総武高校では少数派のMAXコーヒー愛好家なので邪険にもできない。難しい話である。

「そういや、由比ヶ浜とは会つたか？あいつも総武の一年なんだけど」

「…誰だっけ、そいつ」

「ハツちゃんの事故の元その1ガールよ。犬の方。あれは磨けば美人になると見た」

「あー、そんな名前だったっけな」

「自分の人生棒に振りかけた事件を半分忘れてやがる。すげーや」

「いや、身体が勝手に動いただけだから。あれは黒歴史だから引つ張るな」

などと言いつつカバンから教科書を取り出すハツちゃん。初登校の際に教科書を忘れるなんて事はなかったようだ。少し安心。

そんな会話をぐだぐだしていると、人がそろそろ集まり始めて来た。

自分をぼっちぼっち言うハツちゃんのポテンシャルはどんなものが割と興味はあるのだが、まあ孤立をさせない程度にはフォローする事にしよう。

「終わった…」

「ハツちゃん、お前アレ過ぎない？」

とりあえず、授業については問題はなかった。入院中にもちよくちよくノートのコピーを持っていったのと、授業内容がまだ中学のおさらいが終わった所程度の進み具合だった事からだ。

だが、問題は休み時間。

グループはある程度できているとはいえ、クラスの男子にはハツちゃんがどうして怪我をしたのかや、その根が善良な人柄は話している。なのでさほど苦もなくクラスに溶け込めるかと思っていたが。

この野郎、質問責めに合うやいなや「ちよつとトイレ」とエスケープをかましたのである。マジかお前。

それからは、アンタツチャブルな雰囲気醸し出されてしまった。

「あいつは一人が好きなんだよ」とは誰かの言葉。やめてくれ、その言葉は俺にも効く。

「スタートダッシュで出遅れて、どこまで行っても離されるーを実演してんじゃねえよ。だからお前は八幡なんだよ」

「おい、お前も小町もだけど八幡を悪口みたいに使うなや。あと、マキバオーとか誰が知ってんだよ」

「むしろハツちゃんが知ってる事にビビってんだが」

なんて言葉を交わしつつ、バッグを二つ持って行く。

「ハツちゃん、バッグが重い。置き勉しとけよ」

「ぼつかお前、それやったら盗まれたり落書きされたりするだろうが」  
「初日からのリスクヘッジが常人のレベルじゃねえ。でも言わせてくれ。馬鹿じゃねえの?」

「…でも良いのか?お前、俺に付き合っつて貰って」

「ハツちゃんよ、一つ教えてやる」

「どつかのグループに入れてたら、そもそもハツちゃんの世話係とか立候補しないから」

「…お前もぼっちの道に行く奴だったのか」

「フツ、趣味は一人TRPGだ」

「アレ一緒にやる友達が付属してないって欠陥品だよな」

「まあ、いつも通りハツちゃんに布教するとするよ。COCなら一対一でやれなくないし」

「お前作るシナリオエグいんだよ」

「App17の子がいつぱい出てくるハーレムシナリオでもか?」

「それ全員神話生物だった奴じゃねえか」

「ハツハツハ」

「うぜえ」

「酷ッ」

ハツちゃんの歩く速度に合わせてのんびりと駅に向かう。

「ハツちゃん目の付け所が斜め下過ぎてシナリオの本線に乗ってくれないんだよな。いや、それはそれで楽しいんだけど」

「お前何でも楽しむな」

「あれよ多分」

「お前といるっただけで、それなりに楽しいんだよ」

「…おう」

そんな会話をしつつ、ハツちゃんの登校初日は過ぎていった。

俺は、俺のクラスメイトである氷川誠二を少し不気味に思っている。

それはきつと、氷川からの善意に見返りが見えないからだ。ぼっちといっても俺と氷川は違う。俺は友達を作れないのに対して、氷川は

親しい友達を作っていないだけだからだ。コミュニケーション能力も、中の上の容姿もあり、その気になればクラスのトップカーズに食い込めるだろうに。

それを放り投げて、俺の手助けをしてきている。それは、とても歪に思えてならない。

裏切る為の演技かと思ったことは何度となくある。だが、疑えば疑うほど、こいつの行動には善意と敬意があるのだとわかってしまった。

俺に敬意を抱くなど、そんな無意味な事をする奴には見えないのだが。

「なあ氷川」

「ん？」

「なんで、俺に構うんだ？」

「…んー、きっかけはお前が凄いやつだと思ってたからだよ。あの日の事故、俺は飛び出せる位置にいた。けど、足がすくんで立ち止まっちゃった。だから、その勇気を俺は知りたかった」

「…んなもんねえよ」

「いや、ある。考える前に体が動いていたんだろ？それは、お前の心の深い所にある勇気が体を動かした、俺にはそうとしか見えなかった」

「要するに、カツコいいって思ったんだよ。お前の事を」

その言葉に、返す言葉がある。

「それを言うなら、お前だってカツコ良かっただろうが」

「…あ、やつば覚えてた？恥ずかしいから忘れて欲しいんだけど」

「無理だ、あんなの忘れられるかよ」

それは、事故にあつてすぐの事。

車に轢かれて足は妙な方向に曲がり、頭も打ってしまった。激痛と目に入る血から、死んだかなあと思ったその時。

声が聞こえた。

「飼い主さん！救急車呼んで！110番で！」

「う、うん！わかったし！」

「運転手さん、手を貸して下さい！彼の応急手当てをします！」

そんな声と共に、俺の体は仰向けにされ、足は正しい方向に直された。ネクタイを外され胸元を開けられたが、苦しみは減らなかつた。

「運転手さんは止血を！ハンカチを当てて圧迫するだけでも変わります！…… 気道確保オーケー、意識あり、呼吸なし」

不意に、閉じる視界、息を吹き込まれると共に、詰まっていた呼吸が戻ってきたのを感じた。

「よし、戻ってきた！呼吸をしつかり！大丈夫、お前は助かる！だから、生きる事を諦めるな！」

霞んだ目で見たとその顔は、命を助けるヒーローの顔だった。

「や、小町ちゃん。お兄ちゃん連行してきたよ」

「ありがとうございます！氷川さん！」

「うん、やっぱいつ見てもハツちゃんと小町ちゃんが兄弟には見えないわ。浮気疑ったほうがいいんじゃない？」

「ウチを家庭版案件のネタにするんじゃないよ」

家までついてきた氷川。いや、松葉杖の身では駅からの移動は辛かったのがたいが、やはり善意が慣れない。

こいつにはもう過剰なまでに貰ってしまっている、なら何かで返さないで帳尻が合わない。

「じゃ、今度MAXコーヒー奢ってくれや。ペットボトルで」

「邪教徒め」

「いいだろ別に、量飲むタイプだって悪くないだろ、健康以外には」

「いいじゃんお兄ちゃん、せっかくできた友達なんだし。あ、今の小町のポイント高くない？」

「…… 友達？」

「あれ、氷川さんまでお兄ちゃんっぽくなってる」

酷くない？

「ま、いいや。また明日な、ハツちゃん」

「おー…… ってバッグ持ってくんじゃないやねえよ」

「すまん、忘れてた」



「うつかりさんなんですわねー、氷川さんって」

そんな言葉と共に氷川は去っていく。

「うん、氷川さんがいるなら、お兄ちゃんの高校生活も安心だね！」

「… まあな」

本日いきなり逃亡をかましてしまったのは黙っておこう。ぼつちに質問責めの対処とか無理なんだ、うん。

そんな、1日があつた。

## 1—Cの大乱闘

今は6月、ハツちゃんの足のギブスも松葉杖も取れ、体育の「二人組組んでー」で一人余る状況になってしまった事以外はとりあえず問題は無い。ちなみにその一人はハツちゃんと俺と材木座の3人の熾烈なる勝負（じゃんけん）によって決まる事が通例となっている。

もつとも、どこかで欠員が出たら俺がヘルプに行くというのは決まっているのだが。だってあいつら買収してくるんだもん。MAXコーヒーのペットボトルを箱で買う自分としては、出費は抑えられるなら抑えたいのだ。

だが、問題になっていない事が問題な事もある。

俺は普通にクラスメイトとも話したりするのだが、ハツちゃんは未だに「ああ」とか「うん」とかをどもりながら言う程度なのだ。自己主張って大事だと思うんだよなお兄さん。

「なあハツちゃん、お前そろそろクラスに馴染まね？」

「いや、馴染んでるから。空気として必要不可欠な存在なまでであるから」

「流石に空気はあかんだろ。今のお前はクラスでは刺身のつまくらい価値しかないぞ」

「…それは流石に言い過ぎじゃね？結構傷つくんだが」

「まあ好きでも嫌いでもないって位置は楽だから気持ちはわかるんだけどな」

かたやスマホゲームの周回をしながら、かたやSwitchでゲームをしながらでの会話である。どっちが悪いといえば、どっちも悪い。お前ら学校に何しにきているのだ。とは某現国教師の談である。「んで、お前今何やってんの？」

「カリギュラOD。Switch版で出るとは思わなかったからつい買っちゃったよ。PS4版持ってんのに」

「ブルジョワめ」

「医者の家系なめんなよ、ハツちゃん。まあ、金はバイトからだけだな」

「何、お前働いてんの？引くわー」

「引かれるのかよ。漫画喫茶はいいぞ？やる事なくて金だけ貰えるんだから」

「マジか」

「マジマジ。住人の人との挨拶さえしてれば問題はない。むしろ住人の人仕事自主的に手伝ってくれたりするから」

「すげーな住人の人」

「本当に頭上がらないわ。まあ、社会の底辺だから見習いたくはないけど」

「お前…」

「ハツちゃんもウチ来てみる？社会見学的な感じで」

「いや、遠慮しとくわ」

「来といて損はないと思うぞ？いつか小町ちゃんが結婚したとき、家から追い出されるのは誰かを考えたらさあ」

「いや、小町を嫁に出す訳ないだろ。常識的に考えろ」

「あ、シスコンスイッチ入った」

などと言いつつ予鈴がなったのでセーブポイントでセーブをして Switch をしまう。メビウスにはコンビニよりもセーブポイントが多いのだ。まさにコンビニエンス。

「んで、ハツちゃんよ。貸したゲームはやってみたか？」

「… ああ、やったよ。正直甘く見てたわ。エロ展開になった時はクソビビったけど、すっげえ面白かった。でも作者以外 FGO と関係なくね？」

「いずれ分かるさ、いずれな」

「お前それ言いたかっただけだろ」

「使い所意外とないんだよな」

「まあいいや、とりあえず言えるのはアルクエイドが最高だつて事だな」

「は？琥珀さんが最高に決まってるだろ」

「は？」

その言葉がきつかけとなり睨み合いが始まるが、現国の平塚先生が

やってきた事でそこから先に進展することはなかった。

「続きは後でな」

「ああ」

「どうでもいい決闘が始まる！」

事はなく、次の休み時間である昼休みになるとどちらも口を閉ざした。

だがそれは、刃を完全に収めた訳ではない。居合斬りのように、敵を一撃で言い負かす一刀を探しているだけなのだ！

「それはともかく、スマブラやる人手ー上げて」

「あ、やるやるー」

「氷川またSwitch持ってきたのかよ懲りないな」

「じゃあ、ステージランダムアイテム全ありの3スト制なー」

わらわらと集まってくる男子たち。やっぱみんなスマブラ好きなのね。

とりあえずいつも通り俺とハッチちゃんと佐伯と春日が最初になる。

だが、所有者でありこの中で最強である俺は皆に集中狙いを受けてすぐに落とされた。いや、スネークのリモミサはピットじゃ無理やねん。

それからはいつも通りのハッチちゃんの独壇場、3人乱闘では真ん中にいる奴が死ぬという事をわかっている、ひたすらに端に逃げ回りながらブラスターを決めていた。横槍を入れるタイミングの悪辣さにおいて比企谷八幡は最強。さすがの卑劣さである。

そして、二対一になりやられるまでがテンプレ。厨キャラのウルフ使ってそれってどんな気持ち？と煽ってみたらボディにいいのを食らった。おのれハッチちゃんめ。

「じゃあ、交代なー。一位以外ローテで」

「あのー！」

「どした？目黒」

「ほ、僕もSwitch持ってきたんだけど、良いかな？」

「… よっしや野郎ども！追加じゃ！目黒大先生を敬いながら引きず

り下ろすのだ！」

「まあ俺らは次見てるだけだけどな」

「あ、ちよつと待って。いまローカル通信オンにするから。ついでにフレ登録よろしくな」

「あ、うん！」

そうして、ウチのクラスの昼休みの名物となったスマブラは、8人対戦をできるまでの規模となった。

尚、これが一年続いてもハツちゃんのコミュカ改善には役に立たなかつたというのは、俺の少ない人生経験の中でも衝撃の真実の一つである。

まあ、害悪ブラスターウルフが好まれるかといえばそうでないのは当たり前といえれば当たり前なのだが。

ちなみに目黒の持ちキャラはヨッシーであつた。空中戦の鬼がおる。lon1では厄介そうだ。負けるつもりはないが。

なんて事を考えながら見ていると、目黒は見事一位を取ってみせた。流石に新参を集中放火するのはリモミサの鬼佐伯でも躊躇われたのだろうか？ いや、そんな甘い奴ならさつき一位を取れる訳はない。

つまり、目黒の実力という事だろう。これは楽しみだ。

尚、最終戦でアイテムなし終点をやってみたが、俺と目黒はだいたいの互角くらいだった。つまり人柄で一位を取つたのか、策士だな目黒。

本日の放課後。帰宅ラッシュに巻き込まれないようにちよつと駄弁つてから帰るのが俺とハツちゃんのいつもの流れとなつていた。

「んでハツちゃんよ。クラスの連中とそこそこ仲良くなれたかい？」

「…多分な。まあ、ゲーム仲間って感じだろ」

「そこから一步進むのが難しいんだよな。この件じゃ俺も人の事言えないんだけど」

「お前でも、そうなのか？」

「なんかねー、普通に仲良くするのも出来るのよ。一緒に遊んだりす

るのも楽しいって思う。けど、そこで止まっちゃうんだよ、俺は。正直、こんな波長の合う奴とかハッチちゃんが始めてなんだぜ？」

「… そうは見えないがな」

「ハッチちゃんにはどう見えてんだよ」

「このクラスのリーダー格」

その言葉に思わず吹き出す。どれだけ俺を高く、自分を低くみているのやら。

「したらハッチちゃんは取り巻き一号か？ 似合わねー」

「… だな」

「うん、ねえな。なんでスクールルカーストとか面倒なのに関わらなきゃなんないんだよ。番外で十分十分」

「出た、番外とかいう厨二ワード」

「カッコいいと思う心を失わない事は、大事だと思っただ俺」

「いや、それ病気が解けた後で死ぬほど後悔する奴だから」

「ハッチちゃんの経験があったり」

「は？ ねーし何言ってるの？」

「よし、小町ちゃんにLINEで聞いてみよう」

「やめろ下さい…。… ていうかいつ小町と連絡先交換しやがったお前」

「あ、シスコンスイッチ入った」

グダグダな会話をしつつ、そろそろ良い時間なので下校を始める。

「さて、じゃあ琥珀さんが最高である事を教えてやろう」

「は？ アルクエイドが最高にきまつてんだろ」

噛み合わないが、噛み合う二人。その姿を友人と言わないのは、当人たちだけだった。

病院生活に少し慣れたころ、親に持ってきてもらったラノベも読み尽くした頃、来客があった。

「失礼しまーす」

入ってきたのは、総武高校の制服を着た、どこかで見た事のある少年だった。

「こんにちわ、比企谷八幡くん。俺は氷川誠二、1-Cのクラスメイト

だ」

「ど、ども」

「プリントとかノートのコピーとか持ってきた。病院って暇だろ？勉強でもしてるといいかなーって」

「はあ」

そうして渡されたノートとプリントと一冊の本。

紛う事なき、エロ本だった。

「は？」

「なあに、そいつはサービスよ」

「馬鹿かお前？」

「ありや？気に入らなかった？二次元にしか興奮しない人？」

「人を勝手に異常者の括りに入れてんじやねえよ」

「まあ、どんなのが好きか聞かないで渡した俺も悪い。仕方ない、持ち帰ろう」

「…ちよつとだけ中見てもいいか？」

「どーぞどーぞ。でも見すぎるのはダメだぜ？未知のページの方がエロく感じるもんだから。古事記にもそう書いてある」

「忍殺かよ」

「わかる人増えたよなー、アニメ効果って凄い」

「あのアニメは衝撃だったよな、いろんな意味で」

「お兄ちゃん、見舞いに来たよー！」

瞬間、アイコンタクトが飛んでくる。

俺が壁になる、その隙に布団の中に隠せ！

行動は、一瞬だった。

「こんにちわ、君は比企谷くんの妹さん？俺は氷川誠二、クラスメイトだよ」

「あ、どうも！比企谷小町です。お兄ちゃんのお見舞いですか？」

「ああ、比企谷とは席が近くてね。ノートとかプリントとか持ってきた感じよ。それに、比企谷も学校復帰した時に知り合いが居たら多少楽かなーなんて老婆心もあったり」

「わざわざありがとうございますー！」

「いえいえ」

チラッとこつちを見る氷川、ありがとう、お前のおかげでなんとか小町にゴミを見るような目で見られる事は避けられた。

って元凶もこいつじゃねえかと思いをリセットする。プラマイゼロ、むしろマイナスだ。

「それにしても、比企谷と似てないねー。すっごく可愛い。将来が楽しみだ」

「ありがとうございます。けど、今ここには比企谷が二人居ますし、小町で良いですよ?」

「ちよつと小町ちゃん? 何、この中途半端イケメンに絆されちゃった感じ?」

ガバツと近づいて耳打ちしてくる小町。

「お兄ちゃん、これはチャンスなんだよ! わざわざお見舞いに来てくれるクラスメイトなんて居ないんだから、この機会に友達になってぼっち卒業しちやいなよ!」

「ばっか、そんな簡単にぼっちが卒業できるわけないだろ。不治の病だから」

「そんなんだからゴミいちゃんなんだよ」

「協議の結果、名前呼びでオーケーになりました!」

「そうなの? じゃあよろしく小町ちゃん、八幡... 言にくいな、ハッちゃんが良い?」

「... もうなんでも良いわ」

その後は、氷川主催の簡単なノートの内容の講義があつた後、面会時間が終了し、二人は帰っていった。

「どうすんだコレ」

一冊のエロ本を残して。

ちなみに、氷川がこの日からずっと小町の事を家まで送っていたという事実が発覚して、怪我を押しての乱闘に発展しかけるまであと2週間だった。



## 隣のクラスのガハマさん

「やつはろー!」

「うん、その挨拶にだけは慣れんわ。高校デビュー暴走してない?」

「そ、そうかな...」

「いや、見た目はすっごく可愛くなったんだけど、ちよつとチャライ感じがねー。多分ハツちゃんとか「苦手なタイプ」の女子だ...」ってなると思うぞ」

「それはちよつと...でも、これは優美子とか姫菜とかに手伝って貰って、変われた!って私だから、この私でいたいんだ」

「...うん、それなら良いんじゃない?じゃ、頑張つてハツちゃん口説いてねー」

そう言つて逃げようとするも、その手を掴まれる。意外と力強いぞガハマさんツ!?!?

「そこはホラー!協力してくれたりとかじゃないの!」

「いや、なんでハツちゃんがリア充になるのを応援しないといけないんだよ。むしろ積極的に妨害するぞ俺は」

「りあ、じゆう?」

「あ、そこ通じないかー。最近の若者言葉に混ざつてると思ったんだがなー、ネットスラング。ああ、今はリアルが充実してる人の事。つまり俺の敵だ」

「いや、なんで敵対するの?」

「だって自分より幸せなやつとかムカつくじゃん」

「割と最悪な理由ツ!?!?」

「というわけで、俺はガハマさんの恋の応援はしないよ」

「こ、恋じゃないし!」

「そう?前見た時は恋する乙女って感じだったけど」

それは、ハツちゃんが入院して初めての金曜日の事だった。

「すー、はー、すー、はー...よし!...でもなあ...」

「すまん、通つて良いか?」

「あ、うん大丈夫です」

「所で、見覚えがあるんだけど、君ってあの時の飼い主さん？」

「なんでそれを…ってあの時のお医者さん！」

「ども、氷川誠二です。医者は志望してるけどまだ学生よ。ハツちゃんに用事？」

「ハツちゃん？」

「比企谷八幡、ここの病室の主の事。1人部屋って豪勢な金の使い方してるよなー、払いは車の人らしいけど」

「そっか、これひきがやはちまんって読むんだ」

「なんだと思ってた？」

「えっと、ヒキタニヤハタかな？」

「八幡製鉄所は有名だもんなー、というわけで扉オープン」

「ちよ、ちよっとタンマ！」

「何やってんだお前」

「や、ハツちゃん。お客を連れてきたよ」

「ど、ども」

「ド、ドーマ」

「ニンジャの挨拶かお前ら」

とりあえず、目線で「こいつ誰だよ！」と必死に伝えてくるハツちゃん。目線がうつつとおしいので自己紹介をさせるとしよう。ハツちゃんも好意的な感情を向けられて悪い気はしないだろう。

「こちらはいつぞやの犬の飼い主さん。覚えてる？」

「いや、まったく」

「え!?？」と固まる由比ヶ浜さん。まあ、ぼっちってこういう生態なのよ。

「じゃあ、自己紹介からだな。改めて、俺は氷川誠二。忘れてないよな？ハツちゃん」

「あ、当たり前だろ」

死んだ目が泳いでる、コイツ忘れてやがったな。

「じゃあ次、コイツは比企谷八幡。あの日のヒーローな」

「茶化すんじゃないよ」

「事実じゃね？」

「あんなんをヒーローだとか認めてたまるか。今日日のヒーローは誰かを助けつつ自分も助かるもんなんだよ」

などとヒーローの持論を語るハツちゃん。やはり貴様もニチアサの徒か！

「じゃあ最後、どうぞ！」

「え、えっと、私は由比ヶ浜結衣です。比企谷さん、あの日サブレを助けてくれて本当にありがとうございます！お陰で、サブレは今も元気です！…あ、えっとサブレってのはあの日助けて貰った犬の事で…」

「あー、そういう事か」

ハツちゃんが何かを察したのか、空気が冷え込むのを感じる。

「俺は、俺の勝手で動いただけだ。というか、思わず体が動いてたってだけなんだよ。だからあんたが責任を負う必要はない」

「いや、違くて！」

「しかも入院費用はあちらさんが全部持つてくれている。お陰で俺は学校に行かないでのんびりできてるって訳だ。だから、あんたが気にする必要とかは全くないんだよ」

などと、突き放す言葉で伸ばされた手を払いのけようとするハツちゃん。

全く、なんで俺がと思わなくはないが、それでも今泣きそうな彼女をそのままにしてはおけない。

だって、後味が悪いだろう。

「ハツちゃんよ、このまま喋らせておけば「私、なんでもします！」とか言質取れたかも知れないのに勿体無いな」

「オイ」

「それから由比ヶ浜さん、言葉を曲解することに定評のあるハツちゃんだ。伝えたい事があるのなら、ど真ん中ストレートで思いっきりだよ。もう終わった事なのに君がここまで来たのは、それだけ想いが強かったって事だろ？なら、言葉に出さない」と

「…ありがとう」

そうして、一つ深呼吸をしてから、少女は言った。

「ありがとうございますございました、本当に。私馬鹿だから、それしか言えないです。けど、この気持ちは責任とかそんなものじゃなくて！」

「あなたに、サブレの命を救ってもらった家族の、権利なんです。多分」

「権利なら侵害はできないな、ハツちゃん」

「氷川、お前……」

「だから、黙って受け取ってやりなよ」

言外に、キツイ言い方をした事を咎めつつ先を促す。

「わかった、受け取っとく」

「うん！」

「まあ、そんな青春イベントを頭の中から放り出してるのがハツちゃんクオリティなんだけど」

「ま……マジ？」

「うん、前にさらっと聞いてみたらガハマさんの名前すら覚えてなかったよ。イメチェンした今じゃ、顔も一致しないんじゃないかな？」

「うー……なら、もっかい仲良くなれば良いだけだし！」

「頑張つてねー、俺は手伝わないけど」

「そろそろ予鈴が鳴る、次の授業の準備しなきゃな」

「うー……じゃ、また今度ね！絶対ヒツキーと仲良くなりたいたいんだから！」

元気にタタツと隣の教室に戻っていくガハマさん。

「ハツちゃん爆発しねーかなー」

おっと本音が漏れた、気をつけねば。

その後、席に戻ると「何今のビツチ、お前彼女いたの？」とかほざきやがった奴がいた。てめーの客だよ畜生。

「それでさー、ガチに覚えてない訳？ガハマさんの事」

「いや、ぼっちの対人スキル舐めんよ。一度会っただけの奴とか覚

えてられるか」

「ぼっちにも色々いると思うぞ」

放課後の教室、帰宅ラッシュから逃れるためのちよつとした駄弁り。

何だかんだと続いている奇妙な習慣である。

「それで、そのガハマさんとやらがどうしたんだよ」

「今日来たお前がビツチとか言ったチャライ子にジヨグレス進化してた。ありや男子どもがほつとかんよ」

「へー」

「興味なさげなハツちゃんに耳より情報。実はもう言い寄られた事があるらしいけど、その時に好きな人がいるーで乗り切ったそうだよ」

「そいつはなんとも、リア充が好きそうな話だな」

「その人は、颯爽と駆けつけて、我が身を顧みずに車から家族を助けてくれた人なんだってさ」

「… オイ、お前」

「つまるところそういう事。俺、ハツちゃんへの繋ぎの為だけに脈のない美少女に利用されてんだぜ？MAXコーヒー奢ってくれや、ペツトボトルで」

「… まあ、時間が経てば頭冷えるだろ。恋なんて衝動みたいなもんだ」

「ちなみに、俺はガハマさんをハツちゃんと合わせるつもりはないんだけど」

「一応聞くが、なんでだ？」

「ハツちゃんがリア充とか殺したくなるじゃん」

「真顔でしれつと言うな、怖いだろうが」

そんな事を言いつつも、いい時間なので自然と席を立つ。もう少しで吹奏楽部が教室を使いにくるのだ。初めてそれに遭遇した時のハツちゃんの顔は割と見ものだった。どうして写真撮っておかなかったのかッ！

「じゃ、また明日なー」

「おー」

ハッチちゃんは自転車でせかせかと、俺は徒歩でのんびりと帰る。

今日はバイトも無いので、帰ったらハッチちゃんを陥れる次のCOCのシナリオでも書くでしょう。

「あ、でも何処でやる?…ハッチちゃん家押しかけてみるか」

TRPGは割と時間がかかるので、学校でさらっととかはできないのだ。ゴリラTRPGみたいなのを除いてだが。

いや、学校でゴリラTRPGをやる勇氣は俺にはない。アレは深夜テンションでやるものだ。うん。

そんな日の事だった。

## 休日の2人

「ちわー、遊びに来たよー」

「おにーちゃん、氷川さん来たよー」

「いや、なんで休日にウチ来てんだよ」

「え、ほら昨日言ったじゃん。TRPGやるからCOCのキャラシ作っとけて」

「だからってマジで来るか？」

「いや、暇だって小町ちゃんから聞いてたし」

「妹としては、お兄ちゃん相手に普通にしてくれる氷川さんは大切にしたい訳なんですよ」

「お前ら俺の都合無視か」

「ちゃんとウルトラマン見れるように午後から来てやったろ？」

「いや、俺ウルトラマン見てないし」

その言葉に仰天する。なんと、ウルトラマンタイガなかなか良さげな空気だったのに何故だ？

「よし、予定変更だ。貴様をウルトラマン好きに染め上げてやるー」

「はあ？」

「ま、俺もにわかなんだけど」

「オイ」

「もう新しいウルトラマン始まってるとし、布教ついでに復習も良いかなーって」

「というわけで、ハッチちゃんが好きそうなのと言えば・・・やっぱジードかねー」

「ウルトラマンもいろいろいるしな。それで、そのジードってのはどんな奴なんだ？」

「悪のウルトラマン、ウルトラマンベリアルの子が本当のヒーローになるまでの物語よ」

あ、ちよつと反応した。

「まず、ウルトラマンベリアルってのは光の国を裏切った悪のウルトラマンで、初出は映画、大怪獣バトル ウルトラ銀河伝説 THE

MOVIE。ベリアルの宿敵であるウルトラマンゼロもここで登場してるな。その後生き返ったりなんなりしながらついに宇宙の破壊に成功した！つてのがジードの始まり。まあ多くは語るまい、見よーぜー」

そうして、バッグからタブレットを取り出す。

「あ、無線借りて良い？」

「まあ、構わんぞ」

教えられたパスワードで無線を設定して、定額動画サービスに接続する。本当にいい文明になったと思う。いや、いちいちレンタルビデオ屋に行くのも楽しかったけどね。

「じゃあ、始めるぞー」

「意外といけるな、ウルトラマン」

「そうだろ？」

「正直甘く見てたわ、子供向けだろ？つて」

「始めつからウルトラマンはオタク向けなんだよなー。俺も古いのちよつと見たけどあれブラック過ぎてクソ笑うからな」

「それはそれで気になるな」

とりあえず6話見終わっての小休止。小町ちゃんの入れてくれた麦茶のなんと美味しい事か。

そして、やっぱ6話は良い。前半のギャグからレイトさんのサラリーマンの生き方がリクに生き方を気付かせるあたりはちよつとウルつときたくらいだ。

「だが、プリキュアほどじゃあないな」

「えー、スタートウインクル言うほど良いか？変身シーンは好きだけど、前作が神過ぎたからどうしても比べちゃってなー」

「別物は別もんで良いだろうが」

「それと同じ事よ。Hugプリが面白いのもスタートウインクルが面白いのもウルトラマンジードが面白いのも全部別で全部良い。あれだ、みんな違ってみんな良いんだよ」

「お前…それ本気で思ってるか？」



「いや、擁護できないほどのクソはこの世に存在していることは体験した」

「お前もだったか…」

「オーブニングはいい曲なんだけどなー、さすがオーイシお兄さんって感じで。ただあのアニメと紐つけられてしまったが為に聞くたびに悪夢が蘇るのだ」

「お前CD買ったのかよ」

「いや、Apple Musicで」

「お前定額制好きだな」

「学生のうちは安いんだよ、Apple Music。お陰でアプリ入れてないのにバンドリの曲のプレイリストがあるくらいに」

「お前アプリやれよ、課金して社会を回せよそこは」

「音ゲー苦手なんだよ。あと、俺の課金力は全てFGOに吸い尽くされているので無理だ」

「ちなみに月いくら？」

「福袋ある時に課金するだけ。流石に当たらないとわかってるガチャに金は出せん…けどなあ、ガネーシャさんクソ欲しくて1万入れたんだよなあ、爆死したけど」

「分からん。ツイッター見たが中身デブいオタク系キャラだろ？なんでそこまで」

「そりゃ、CCCやりやわかるさ。あの子…って年じゃないけど、あの子は苦しんで、迷って、間違っって、それでも2人の男に命と心を救われてその先の未来の姿がガネーシャさんなんだよ。マイルームの会話超気になるじゃん。ウチにはカルナも居ないけど」

「ざまあ」

「おのれリアルラックでカルナ引いた男め！」

話が脱線しまくるが、今日の目的を忘れてはならない。ような気がしたが、ハッチちゃん家も定額動画サービス入ってるしまあここまで悪い反応ではなかったから後は勝手に沼に落ちるだろう。

「じゃ、どうする？」

「…ちよつと飽きた。いつでも見れるってのはこういうのがアレだ

よな」

「そうか… じゃあ、TRPGやる… にしてはちよつと時間足りないな。しゃーなし、面白いフリーゲーム見つけたからやるーぜー」  
「へえ、どんなのだ？」

「さまざまな困難をくぐり抜けて告白するゲーム。正直ハツちゃんのリアクションが見たい」

「どんなの… って人のPC勝手にいじるんじゃねえよ」

「いいじゃないの、コメントオフにしてーと。さ、やってみ」

「… なあ、タグにホラーゲームとかあるんだが」

「気にしない気にしない」

RPGアツマールにあるそのゲームを起動する。

タイトルは、*“DokiDoki告白ゲームみつみつけ”*

悪名高いと噂されている通称 *“ドキドキ文芸部”* からインスパイアを受けて作成されたというゲームだ。

「さて、どうぞ」

「言っておくがリアルぼつちの俺に恋愛とか無理だから。なんならオンラインゲームでもぼつちを貫き通したまでである」

「あ、俺もそうだわ。未だにスプラトゥーンのリーグマッチやったことないし」

「目黒だったか？あいつ誘えよ」

「いや、目黒っち今ブレワイの沼に嵌ってるんだよ」

「… まあ、名作らしいしな」

「今度出るスイッチLite買ってやってみなつて、崖を見ると登りたくなる衝動が生まれるから」

「いや、あれ買うなら普通にデカイの買うぞ。大画面でやりたいだろどうせなら」

「そうだよなー、何気にバトレボ以来だったもんなー本格ポケモンバトルを大画面でやれるのは。いや、ピカブイのあの空気も嫌いじゃないんだが、やっぱスカーフホルード様の地震で全てを薙ぎ払うのやりたいのさ」

「移行出来るか微妙だろ、ホルード」

「そこは信じるさ。いや、ローテトリプル無くなるって噂の時も信じて裏切られたけれども」

などと言いつつニューゲームをクリックするハツちゃん。

そして、開始して1分でハッピーエンドを迎えた。

「いや、何これ」

「まあまあ、セーブして次の週に進むのだ」

そうして、徐々に明らかになっていくストーリー。この世界は、男である主人公がヒロインにチョコレートを渡すまでに様々な困難を乗り越えていくという物語だ。

そして、ハツちゃんは作者の想定通りに困難を突破し、見事1度目のチョコレートを綾に渡す事を成功した。

途中で、元気系ヒロインの沙也加にチョコを一度も渡さなかったのは流石のハツちゃんというところだろう。エンドコンプの為に後々渡す事になるのだろうがこれは言わぬが華だ。

そして、綾に一度チョコレートを渡すと、教室の様子が様変わりした。綾の近くだけが、まるで牢獄のようになっていた。

「いや、ナニコレ？」

「全てに理由はあるから、まあやるだけやってみ」

「…まあ、意外とこのゲーム面白いからいいけどよ」

そうして、国語力の高いハツちゃんはヒントを完全に読み取り、見事綾に2度目のチョコレートを渡した。

「いや、スゲーゲームだったなオイ」

「まあ、ハツちゃんはまだこのゲームをクリアしていないのだけどね」

「ああ、エンディング20がグランフィナーレって感じなのな。正直どのヒロインも怖くなってきたが、まあやってやるさ」

「というわけで見事空を飛んだハツちゃんにヒントタイム。右上に居る子に話しかけまくと良い情報が貰えるぜー」

「いや、それ最初に言えよ」

「だって簡単にクリアされたら悔しいし」

などどぐだぐだしていたらもう良い時間だ。そろそろ帰らなくて

はならない。一応医者の家系としては、私大医学部レベルの学力は身につけていないと居心地が悪いのだ。

「じゃ、感想聞かせてくれよー」

「おー、また学校でなー」

そして、次の日にハツちゃんにメッセージを送ってみたら、「このゲームは面白かった。だがそれはそれとして美人の幼馴染が両思いとか死ねばいいのに」と見事なクリア宣言をしてくれた。

これは、なかなかの好感触だろう。

今度は、猫耳猫でも貸してみよう。同じ作者さんの作品なのだからきつとハツちゃんも気にいるだろう。

そんな、土曜日の話だった。